



「本当によい子とは？」

- 3歳のM君が楽しそうにおもちゃで遊んでいたとき、S君がやってきて「おもちゃ、貸して」と言いました。しかし、大好きなおもちゃに夢中のM君は貸そうとしませんでした。あなたはM君にどのように対応しますか？
ほとんどの大人は「M君はよい子だから」と言い聞かせて、S君におもちゃを貸すように促すのではないのでしょうか。あるいは、自分から貸せる思いやりのある子になってほしいと期待するのではないのでしょうか。果たして、それが本当によい子でしょうか？
- おもちゃはM君にとって大切なものなので、すぐに「いいよ」とは言えないはずですが、むしろ、「今、僕が遊んでいるから貸さない！」と、自分の気持ちを押し込めるのではなく、素直に伝えられる方が大事で、子どもの自然な感情表現です。思いやりとは、他者の気持ちを理解して行動することです。しかし、その前に自分の感情(うれしい、悲しい等)を表情や言葉、行動で表現できることが先です。それが土台となり、他者に対する感情(思いやり、かわいそう、助けてあげたい等)が構築されます。周囲の大人や親の期待に応えるだけのよい子ども(小さな大人)に育ててはいけないと思います。
- 経験が子どもを創り出します。友達に物を貸せる子どもになるためには、子ども自身が「貸してあげたい」「貸してもらってうれしかった」と思える経験がなければ行動に結び付きません。M君が納得して貸してあげたとき、あるいは、少し時間が経過してから貸してあげたときに、「S君におもちゃを貸してあげて優しいね。先生はとってもうれしいよ！」と、具体的によかった行動を言葉にしてほめたり、思いきり抱きしめたりしましょう。それがよい行動の定着につながります。子どもが自己主張と自己抑制のバランスがとれるように、相手に伝わる表現の仕方を伝えたり、教師がモデルを示したりすることも大切となります。
- 辛いことがあっても表情に出さず、辛く感じない姿を見せる子どもが我慢強い子と誤っていませんか。それは誤解です。自分のポジティブな感情もネガティブな感情も素直に表現できる子どもを育てましょう。「よく泣き、よく怒り、よく笑う子は、我慢する力も育ち、よい子になります」

〈子どもに愛情を伝える4つの方法〉

- 1 触ること(スキンシップ・なんでもない抱っこ・のんびり抱っこ)
- 2 見ること(子どもは見てほしいもの)
- 3 声を掛けること(存在そのものを認めていることを伝える)
- 4 話を聴くこと(子どもはいつも話を聴いてほしいもの)



スキンシップは、栄養を与えることと同じくらい重要です。「いたいのいたいの飛んでけー」は、言葉で痛くないと暗示をかけながら、患部に手を当てることで、不思議と痛みが和らいだり、心が穏やかになったりします。これが本当の「手当て」です。

かづの校副校長 加賀谷 勝